

日サ協発第25050006号
2025年6月19日

関係各位

公益財団法人日本サッカー協会

国際サッカー評議会(以下、IFAB)から2025年3月26日付回状第30号をもって2025/26年サッカー競技規則の改正を含む、第139回IFAB年次総会における決定について通達されました。

通達自体の日本語訳(概略)は、下記のとおりです。今回の改正により、ゴールキーパーが手や腕で8秒を超えてボールをコントロールした場合、反則となり、その反則があった場所に近いサイドからのコーナーキックが相手チームに与えられます。その8秒を主審がカウントするとき、目で見て分かるように主審は片方の腕を上げて最後の5秒をカウントダウンすることになります。競技規則の変更は、通常2年の試行を経て導入を検討されるのですが、今回は、試行で明らかに良い分析結果が得られたことから1年での導入が決定されました(詳細は添付4:背景とQ&Aを参照)。また、これまで試行となっていた「キャプテンオンリー」が各競技会の判断によりガイドラインに従って実施できることが、競技規則第3条「競技者」に記載されました(添付3:キャプテンオンリーガイドラインを参照)。キャプテンが敬意をもって行動し、適切に振る舞うことを条件に、主審は基本的にキャプテンに対して重要な判定を説明することができるようになります。これにより、競技者と審判員の協力関係、そして信頼関係がさらに高まり、サッカーという競技のイメージが守られることが期待されます。さらに、ドロップボールによるプレーの再開方法も変更になります。これまで、最後にボールに触れた競技者のチームにボールはドロップされていましたが、今回の改正によりボールを保持したであろうチームが主審にとって明らかな場合、そのチームの競技者にボールがドロップされることになります。また、ボールがドロップされる場所も、これまでの競技者が最後にボールに触れた場所から、主審がプレーを停止したときにボールがあった位置へと変更されます。

サッカー競技にかかわる関係者、特に競技者、監督/コーチそして審判員の皆さまには、これまでどおり、これらの改正を十分に理解した上で、プレー、指導、そしてレフェリングに携わっていただきたく、お願い申し上げます。

IFABからの回状に添付されている「2025/26年競技規則変更－概要と詳細」の日本語訳は添付1のとおりです。各協会、連盟等において、加盟クラブ、チーム、審判員等関係者に周知徹底を図られるよう、併せてお願い申し上げます。

これらの改正等は、国際的には2025年7月1日から有効となります。日本サッカー協会、各地域/都道府県サッカー協会等が主催する他の試合については、添付2のとおり適用されます。なお、今回の競技規則の主な改正についての説明用映像を本協会のホームページに6月下旬までに掲載する予定です。

記

第139回国際サッカー評議会年次総会の決定について

第139回IFAB年次総会が、アイルランドサッカー協会会長コンラッド・カークウッド氏の議事進行により、2025年3月1日北アイルランドのベルファストにおいて開催された。年次総会で採択された決定事項の概要は、以下の通りである。

2025/26年競技規則は2025年7月1日から有効になる。その日付以前に開始される競技会は、変更を競技規則変更の施行と翻訳の手助けとするため、添付の文書(2025/26年度規則変更および「キャプテンオンリー」のガイドライン)をご覧いただきたい。また、これらの文書は <https://www.theifab.com/documents> にも掲載している。

2025/26年競技規則は2025年7月1日から有効になる。その日付以前に開始される競技会は、変更を早める、または次シーズン開始時まで適用を遅らせることができる。

1. 2025/26年競技規則

いくつかの国で試行され、説得力ある結果が得られたことにより、ゴールキーパーによる時間の浪費を防止する目的で、第12条「ファウルおよび不正行為」の変更が承認された。これにより、ゴールキーパーはボールを8秒まで保持することが認められるが、それを超えると罰せられ、相手チームにコーナーキックが与えられる。ゴールキーパーがボールを放すまでの残り時間を認識できるよう、主審は手を上げて残り5秒をカウントダウンする(詳細については、<https://www.theifab.com/documents> から、「手や腕でゴールキーパーがボールをコントロールすること」の変更に関するQ&Aにアクセスできる)。

さらに、以下の変更が承認された。

● 第3条 - 競技者

「キャプテンオンリー」のガイドライン(添付)は、「注記および修正」の項に記載され、第3条でも言及される。もし、まだ実施していないのであれば、競技会には、フィールドにいる競技者の振る舞いを改善し、そして競技者と審判員の信頼関係をより良くし、さらには審判員の獲得とその活動の継続に好影響を与えるために「キャプテンオンリー」のガイドラインを実施することが強く求められる。

● 第8条 - プレーの開始と再開 - ドロップボール

プレーが停止されたとき、ボールがペナルティーエリア外にある場合、ボールを保持していた、または保持したであろうチームの競技者が主審にとって明らかであれば、ボールはそのチームの競技者の1人にドロップされる。もしそうでなければ、最後にボールに触れたチームの競技者にボールはドロップされる。ボールはプレーが停止されたときに、ボールがあった位置にドロップされる。

- **第9条 – ボールのインプレーおよびアウトオブプレー**

チーム役員、一時的に競技のフィールドから離れている競技者、交代要員、交代して退いた競技者、または退場になった競技者が、フィールドから出ようとしているボールに触れた場合、不正に妨害しようとする意図がなければ、主審は間接フリーキックを与えるが、懲戒の罰則は与えない。

- **ビデオアシスタントレフェリー(VAR)実施手順**

VARシステムを採用している競技会では、競技会はVARの「レビュー」またはVARの長い「チェック」の後に、主審によるアナウンスを行うことができる。

- **審判員のための実践的ガイドライン**

VARシステムを採用している競技会では、ペナルティーキックが行われるとき、副審はオフサイドラインであるペナルティーマークの延長上に位置することが推奨される。これは、VARが侵入やゴール/ノーゴールの判定を監視することができるためである。

2. 試合参加者の行動の改善を目的としたその他の試行

初期段階の良好な結果に基づき、「クーリングオフ時間」は、特にグラスルーツの競技において有効であることが認められた。そのため、当面の間、国内上位2つのリーグ、または各国の「A」代表のチームが関わらない競技会では、この試行を引き続き選択できることで合意した。

3. その他の事項

不正行為を試合参加者自身に抑制させるために、審判員がボディカメラを着用する試行が進行中である (<https://theifab.com/trials/body-cameras/>)。それに加え、こうしたカメラを、ライブ放送／中継を含むより広い範囲で使用する可能性を探る前に、品質と安全基準を策定するための試験をトップレベルの競技会で行えることがFIFAに対して承認された。

FIFAは、Football Video Support(映像を用いた判定サポートシステム)の将来、半自動オフサイドテクノロジーの進展、そして脳振盪への意識を高める「Suspect and Protect(疑わしければ、守れ)」というキャンペーンについて最新の情報を提供した。

次の2年間の任期を務めるサッカーおよび技術諮問委員会(FAP-TAP)の構成について承認した (<https://theifab.com/organisation/>)。

2025/26年版競技規則のフルバージョンは、近くIFABのウェブサイトからダウンロードできるようになる。また、競技規則の最新版は、2025年7月1日よりIFABのアプリ (<https://www.theifab.com/logapp/>)でも見ることができる。

IFABは、競技規則が継続的に進化し、競技のフィールドにおける公平・公正さと高潔さを促進、また保証するため、そして競技における変化を反映していけるよう、引き続きサッカー関係者と緊密に連携し、尽力していく。

公益財団法人 日本サッカー協会
〒112-0004 東京都文京区後楽 1丁目4-18 トヨタ東京ビル
Tel.050-2018-1990
www.jfa.jp

みなさま方のご協力に感謝する。何か疑義、質問があれば、お問い合わせいただきたい。

IFAB 事務局長
ルーカス ブラッド

[添付]

添付1:2025/26年サッカー競技規則変更の概要と詳細

添付2:2025/26年サッカー競技規則適用開始日

添付3:「キャプテンオンリー」ガイドライン

添付4:手や腕でゴールキーパーがボールをコントロールすることについて 背景とQ+A

2025/26 年 競技規則の変更 競技規則変更の概要

第 3 条 – 競技者

- 競技会は「キャプテンオンリー」のガイドラインを実施することができる。

第 5 条 – 主審

- ゴールキーパーが手や腕でボールをコントロールすることに対する 8 秒制限の残り 5 秒をカウントダウンするために主審は合図する。

第 8 条 – プレーの開始および再開

- プレーが停止されたとき、ボールが
 - ペナルティーエリア内にあった場合 – ボールは、ペナルティーエリア内で守備側チームのゴールキーパーにドロップされる。
 - ペナルティーエリア外にあった場合 – ボールを保持していたチーム、または保持したであろうチームが主審にとって明らかであれば、ボールはそのチームの競技者の 1 人にドロップされる。もしそうでなければ、最後にボールに触れたチームの競技者の 1 人にボールはドロップされる。ボールはプレーが停止されたときにボールがあった位置にドロップされる。

第 9 条 – ボールのインプレーおよびアウトオブプレー

- チーム役員、交代要員、交代して退いた競技者、退場になった競技者、または一時的に競技のフィールドから離れていた競技者が、競技のフィールドから出ようとするボールに触れたが不正に妨害しようとする意図がなかったとき、間接フリーキックが与えられるが、懲戒の罰則は与えられない。

第 11 条 – オフサイド

- 競技者がオフサイドポジションにいるかを決めるのに、ゴールキーパーがボールを投げたときは最後のコンタクトポイントを用いるべきである。

第 12 条 – ファウルと不正行為

- 手や腕で 8 秒を超えてボールをコントロールしたゴールキーパーは罰せられ、相手チームにコーナーキックが与えられる。

第 16 条 – ゴールキック

- ゴールキックになる状況を詳細に述べている他の条文を参照すること。

第 17 条 – コーナーキック

- コーナーキックになる状況を詳細に述べている他の条文を参照すること。
- コーナーキックは、反則が起きたときのゴールキーパーの位置に近いコーナーエリアから行われる。

その他:

– VAR 実施手順

- 競技会は VAR の「レビュー」または VAR の長い「チェック」の後に、主審によるアナウンスを行うことができる。

競技規則変更の詳細

以下、2025/26年競技規則の変更点となる。各変更点について、これまでの文章に加え、改正された、または追加された文章が記されている。また、必要に応じて、変更理由も付記している。

符号

競技規則の主な改正に黄色の下線を引き、余白をハイライトした。

編集の変更に文字と同色の下線を引いた。

YC=イエローカード(警告) RC=レッドカード(退場)

第3条 - 競技者

10. チームキャプテン

追加された文章

各チームには、フィールド上に(キャプテンとして)識別できるアームバンドを着用したキャプテンがいなければならない。チームのキャプテンは、なんら特別な地位や特権を与えられているものではないが、そのチームの行動についてある程度の責任を有している。

競技会は、「注記および修正」に記載されている「キャプテンオンリー」のガイドラインを実施することができる。

解 説

競技会には、フィールドにいる競技者の振る舞いを改善し、そして競技者と審判員の協力関係を高め、信頼関係をより良くするために「キャプテンオンリー」のガイドラインを使用することが勧められている。

第5条 - 主審

6. 主審のシグナル

(...)



ゴールキーパーが手や腕でボールをコントロールすることに対する8秒制限の残り5秒をカウントダウンする。

第8条 - プレーの開始および再開

2. ドロップボール

修正された文章

進め方

- 次の状況でプレーが停止された場合、ボールは、ペナルティーエリア内で守備側チームのゴールキーパーにドロップされる。
 - ボールがペナルティーエリア内にあった。または、
 - ボールが最後に触れられたのがペナルティーエリア内であった。

- ~~その他のすべてのケースにおいて、主審は、ボールが最後に競技者、外的要因または審判員(第9条1項に示される)に触れた位置で、最後にボールに触れたチームの競技者の1人にボールをドロップする。~~
- プレーが停止されたとき、
 - ・ ボールがペナルティーエリア内にあった場合、主審は、ペナルティーエリア内で守備側チームのゴールキーパーにボールをドロップする。
 - ・ ボールがペナルティーエリア外にあった場合、ボールを保持していたチーム、または保持したであろうチームを主審が判断できれば、そのチームの競技者の1人にボールはドロップされる。もしそうでなければ、最後にボールに触れたチームの競技者の1人にボールはドロップされる。ボールはプレーが停止されたときにボールがあった位置にドロップされる。
 - ・ (...)

解 説

ボールが、最後にボールに触れたチームの相手競技者に、明らかに渡る場合がある。そのようなケースでは、そのことが主審にとって明白な場合に限り、ボールを保持したであろうチームにボールをドロップすることがよりフェアである。ペナルティーエリア外では、これからは、プレーが停止されたときにボールがあった位置にドロップされることになる。

第9条 – ボールインプレーおよびアウトオブプレー

2. ボールインプレー

追加された文章

ボールは(…)フィールド内にある場合も常にインプレーである。チーム役員、交代要員、交代して退いた競技者、退場になった競技者、または一時的に(負傷、用具を直すためなどで)競技のフィールドから離れている競技者が、不正に妨害しようとする意図なく、明らかにフィールドから出ようとしているインプレー中のボールに触れた場合、間接フリーキックが与えられるが、懲戒の罰則は与えられない。

解 説

監督、交代要員、または一時的に競技のフィールドから離れている競技者(その他の人も含めて)が、素早くプレーが再開されるように、アウトオブプレーになるボールに触れてしまうことがある。このような場合、繰り返しテクニカルエリアから出ることによって警告される場合を除き、間接フリーキックが与えられるが、懲戒の罰則は与えられない。

第11条 – オフサイド

2. オフサイドの反則

追加された文章

* ボールを「プレーした」か「触れた」最初のコンタクトポイントを用いるべきである；しかしながら、ゴールキーパーがボールを投げたときは、最後のコンタクトポイントを用いるべきである。

解 説

競技者がオフサイドポジションにいるかどうかを決めるとき、ボールとの最初のコンタクトポイント(競技者がボールに触れた瞬間)が用いられる。しかし、ゴールキーパーがボールを投げたときは、最後のコンタクトポイント(ボールが手や腕から離れる瞬間)を用いるべきである。これにより、より明確で一貫した基準が示されたことになる。

第12条 – ファウルと不正行為

2. 間接フリーキック

改正された文章

ゴールキーパーが自分のペナルティーエリア内で、次の反則のいずれかを行った場合、間接フリーキックが与えられる。

- ~~ボールを放すまでに、手や腕で6秒を超えてコントロールする。~~
- ボールを手放した後、他の競技者がボールに触れる前に、手や腕でボールに触れる。
- 次のような状況で、ボールを手や腕で触れる。ただし、ゴールキーパーがボールをプレーに戻すため、
- 明らかにボールをけった、またはけろうとした場合を除く。
 - ・ ボールが味方競技者によって意図的にゴールキーパーにキックされる。
 - ・ 味方競技者によってスローインされたボールを直接受ける。

~~ゴールキーパーがボールを手でコントロールしていると判断されるのは、次のときである。~~

- ~~ボールがゴールキーパーの両手で持たれているとき、またはボールがゴールキーパーの手と他のもの（例えば、グラウンド、自分の体）との間にあるとき、ボールに手や腕のいずれかの部分で触れているとき。ただし、ボールがゴールキーパーからはね返った、またはゴールキーパーがセーブした場合を除く。~~
- ~~ゴールキーパーが広げた手のひらでボールを持っているとき。~~
- ~~ボールをグラウンドにバウンドさせる、または空中に投げ上げたとき。~~

ゴールキーパーが手でボールをコントロールしているとき、相手競技者は、ゴールキーパーにチャレンジすることができない。

3. コーナーキック

ゴールキーパーが自分のペナルティーエリア内で、ボールを放すまでに手や腕で8秒を超えてコントロールした場合、コーナーキックが与えられる。ゴールキーパーが手や腕でボールをコントロールしていると判断されるのは、次のときである。

- ボールが両手や両腕で持たれているとき、または手や腕と他のもの（例えば、グラウンド、自分の体）との間にあるとき。
- ゴールキーパーが広げた手のひらでボールを持っているとき。
- ボールをグラウンドにバウンドさせる、または空中に投げ上げたとき。

主審は、いつゴールキーパーがボールをコントロールして8秒が始まるかを判断し、そして手を上げて目で見て分かるように最後の5秒をカウントダウンする。

ゴールキーパーが手や腕でボールをコントロールしているとき、相手競技者は、ゴールキーパーにチャレンジすることはできない。

解 説

- ゴールキーパーが手や腕で8秒を超えてボールをコントロールした場合、主審は(間接フリーキックではなく)反則があったときにゴールキーパーが位置していた場所に近いサイドからのコーナーキックを与える。ゴールキーパーが繰り返し反則を行わない限り、懲戒処置はとらない。
- ゴールキーパーに分かるよう、主審は上げた手を使って最後の5秒を合図する。

以下の各項の番号を次のとおり変更する

4. 懲戒処置
5. ファウルや不正行為の後のプレーの再開

第16条 - ゴールキック

追加された文章

ゴールキックは、グラウンド上または空中にかかわらず、最後に攻撃側競技者が触れたボールの全体がゴールラインを越え、得点とならなかったときに与えられる(第8条、第10条、第13条、そして第15条についても参照する)。

第17条 – コーナーキック

追加された文章

コーナーキックは、グラウンド上または空中にかかわらず、最後に守備側競技者が触れたボールの全体がゴールラインを越え、得点とならなかったときに与えられる(第8条、第12条、第13条、第15条、そして第16条についても参照する)。

1. 進め方

追加された文章

ボールは、ゴールラインを越えた地点、または反則が起きたときのゴールキーパーの位置にもっとも近い方のコーナーエリアの中に置かれなければならない。

ビデオアシスタントレフェリー(VAR)実施手順

4. 進め方

追加された文章

最終の判定

- レビュープロセスが終了したら、主審は、「TVシグナル」を示し、最終の判定を伝えなければならない。また、競技会はFIFAのガイドライン、そしてVARハンドブックに示されているように、VARの「レビュー」またはVARの長い「チェック」の後に、公に決定を説明し、アナウンスするシステムを導入することもできる。
- 主審は、(必要に応じて)懲戒処置をとり、変更し、または撤回し、競技規則に基づき プレーを再開する。

解 説

試行の成功を受けて、競技会はVARの「レビュー」またはVARの長い「チェック」の後に、主審による決定のアナウンスそして説明を行うことができるようになった。

用語集

ドロップボール

改正された文章

プレーを再開するための方法——主審は、最後にボールに触れたチームの1人の競技者にボールをドロップする(ボールがペナルティーエリア内の場合、ゴールキーパーにドロップする)。ボールは、グラウンドに触れたときにインプレーとなる。

反則が行われたのではなく、例えば、負傷やボールの欠陥などによりプレーが主審によって停止されたときの再開方法(第8条参照)

審判員のための実践的ガイドライン

ポジショニング(位置取り)、動き方とチームワーク

2. ポジショニングとチームワーク

追加された文章

ペナルティーキック

副審は、ゴールラインとペナルティーエリアラインの交点のところに位置しなければならない。

ただし、ゴールキーパーの侵入や、得点が得点でないかを確認するために、テクノロジー（例えば、ゴールラインテクノロジーや VAR システム）を使ってゴールラインを監視できる場合、副審は（オフサイドラインとなる）ペナルティーマークの延長にあるタッチライン上に位置することが推奨される。それは、キックされたボールが跳ね返った場合、副審がゴールライン上にあることで、オフサイドの判断をするためのポジションに戻ることでないリスクが生じるからである。追加副審がいる場合、追加副審はゴールラインとゴールエリアの交点のところに位置しなければならない。副審は、ペナルティーマークの延長上（オフサイドライン）に位置する。

2025/26サッカー競技規則の適用開始日について

各リーグや各種競技会における「2025/26サッカー競技規則」の適用開始日は、以下とする。

リーグ	適用開始日	備考
2025明治安田J1リーグ	8月9日(土)	第25節
2025明治安田J2リーグ	8月2日(土)	第24節
2025明治安田J3リーグ	8月16日(土)	第23節
2025JリーグYBCルヴァンカップ	9月3日(水)	プライムラウンド 準々決勝 第1戦
第27回日本フットボールリーグ(2025)	8月30日(土)	第19節
2025/26WEリーグ	8月9日(土)	2025-26シーズン開幕より
2025プレナスなでしこリーグ1部	8月30日(土)	第16節
2025プレナスなでしこリーグ2部	9月27日(土)	第19節

JFAが主催する競技会	適用開始日	備考
天皇杯 JFA 第105回全日本サッカー選手権大会	8月6日(水)	ラウンド16(4回戦)
各種全国大会(決勝大会)	原則 7月25日(金)	現競技規則(2024/25)・新競技規則(2025/26)のどちらを適用するかを各競技会毎に確認し、競技会規定等に明記する。また、代表者会議や監督会議、マッチコーディネーションミーティングにてその都度確認する。 ※高円宮杯プレミアリーグU18の適用は第12節の9月6日からとする

上記以外の競技会	適用開始日
地域・都道府県FAが主催する各種大会	遅くとも2026年4月1日(水) ※大会主催者が適用開始日を決定する。

「キャプテンオンリー」ガイドライン

はじめに

敬意と公平さはサッカーの中核となる価値観であるが、主審やその他の審判員は、判定を下す際に言葉や行動による異議にたびたびさらされている。極端なケースでは、競技者に走り寄られる、取り囲まれる、あるいは威嚇されることもある。このような行為は、主審への敬意の欠如の表れであり、サッカーが作り出すイメージを損ない、審判員にとって脅威となり、動揺させかねないものである。以下に示される実施手順は、審判員と競技のイメージを守ると同時に、キャプテンにより大きな責任を与えることを目的として試行される。

主審とキャプテンの連携をより強化することで、公平性と互いの尊重を育むことができる。このような観点から、主審が重要な判定を説明できるように、敬意をもって行動し、適切に振る舞うことを条件にキャプテンのみが話しかける(アプローチする)ことが認められる。

以下の簡略化したガイドラインは、「キャプテンのみ」の原則を適用したい競技会主催者の手助けとなるはずである。この実施手順のすべてに従わなければならない、IFABの書面による承認がない限り、変更は認められない。

ガイドライン

- 競技者と主審との通常のやり取りは認められており、(透明性を高め、不満や対立の可能性を回避するために)引き続き重要である。
- (キャプテンを含め)言葉や行動で異議を示す競技者は、警告される(イエローカード)。
- 主審は、必要に応じて、キャプテンまたは事象にかかわった競技者に重要な決定について説明する。
- 重大な状況や重要な事象または決定の後に、競技者が主審を威嚇したり取り囲んだりするのを防ぐために;
 - 各チームから主審に話しかけることができるのは1人の競技者のみ(通常はキャプテン)であり、話しかける際には常に敬意を持って接しなければならない。
 - 主審は、他の競技者に主審自身とキャプテンに近づくことがないように(口頭または身振りで)指示、または促すことができる。
 - チームキャプテンは、チームメイトを主審から遠ざけるように働きかける責任がある。
 - 許可されていないのに主審に近づいたり、取り囲んだりする競技者は、警告されることがある(イエローカード)。
 - 必要に応じて、主審は、キャプテンがチームメイトに決定を説明したり、適切な行動を求めるなどの話しをする時間を与えるために、プレーの再開を遅らせることがある。
- 例えば競技者が反則を行なった、ファウルを受けた、または負傷した場合、キャプテン以外のどの競技者とやり取りするか、どの競技者が主審に話しかける(アプローチする)ことを認めるかは、主審の裁量に委ねられる。

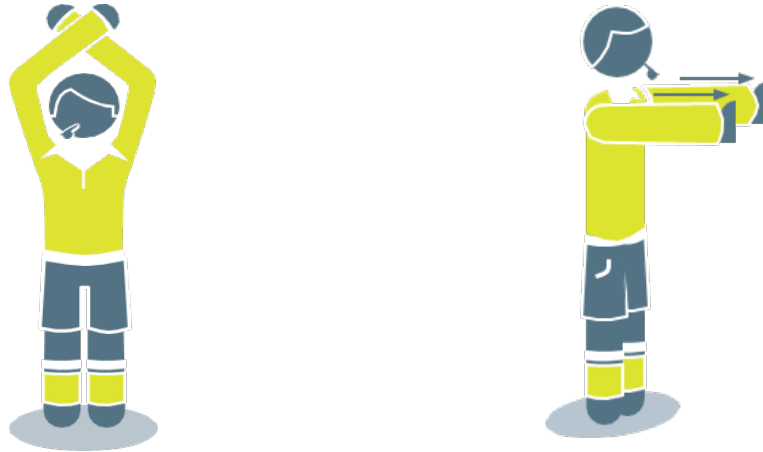
キャプテンがゴールキーパーの場合

- ゴールキーパーがキャプテンである場合、ゴールキーパーの代わりにどの競技者が主審に話しかける(アプローチする)ことになるのかを、キックオフ前のコイントスまでに主審に伝えなければならない。
- 主審に話しかける(アプローチする)ことができるのは、ゴールキーパーか、指名された競技者のどちらか一方のみである
- 指名された競技者が交代または退場になった場合、他の競技者を指名しなければならない

ユース、年長者、障がい者およびグラスルーツ向けのオプション

以下のガイドラインは、ユース、年長者、障がい者およびグラスルーツのサッカーにのみ適用することができる。

- 主審は笛を吹き、次のシグナルを使用して「キャプテンオンリー」の実施手順を開始する。
 - 両腕を頭上に上げ、手首のところで交差させる。
 - 腕の交差を解き、手のひらを開いた状態で体の前に動かし、前方に押し出す動作で競技者が近づいてはならないことを示す。



- キャプテンオンリーゾーンは、主審の周囲4メートル(4.5ヤード)におよぶ。
 - 必要に応じて、主審はキャプテンオンリーゾーンを確保するために競技者から離れることがある。
 - (キャプテンとして)識別できるアームバンドを着用したチームキャプテン以外の競技者は、キャプテンオンリーゾーンに入ることができない。
 - キャプテンには、キャプテンオンリーゾーンを尊重し、主審から少なくとも4m (4.5ヤード) 離れた状態であることをチームメイトに促すというある程度の責任がある。
 - キャプテン以外の競技者がキャプテンオンリーゾーンに入った場合、反則した競技者は行動による異議として警告されるべきである(イエローカード)。
 - 同じチームの複数の競技者がキャプテンオンリーゾーンに入った場合、少なくとも1人の競技者は警告されなければならない(イエローカード)。通常、警告の対象となるのは、キャプテンオンリーゾーンに入ることが認められていないにも関わらず入った最初の競技者、または近づき方が最も攻撃的な競技者である。
 - 同じチームの複数の認められていない競技者がキャプテンオンリーゾーンに入った場合、試合後に関係機関に報告しなければならない。*
- * チームの複数の競技者がキャプテンオンリーゾーンに入った状況に対処するため、競技会主催者が罰則を設けておくことを強く推奨する。

競技規則第12条 変更

手や腕でゴールキーパーがボールをコントロールすることについて 背景とQ+A

背景

競技規則第12条では、ゴールキーパーが手や腕で6秒を超えてボールをコントロールした場合、主審に間接フリーキックを与えるよう求めているがほとんど実施されなかった。その主な理由は、ペナルティーエリア内で間接フリーキックを管理することは難しく、時間を要するからである。それにより、ゴールキーパーはこの規則を無視し、長時間ボールを保持することになった。特に、自チームにとって有利な状況では、時間を浪費し、試合のテンポを遅らせる目的で行われることが多かった。

2025年3月に行われた第139回年次総会で、数百試合に及ぶ試行で得られた説得力ある証拠が示された後、国際サッカー評議会(IFAB)は、ゴールキーパーがボールを保持できる時間を2秒延長し、新しい8秒の時間制限を厳密に実施することを決定した。その際、主審は目で見て分かるように手を上げて最後の5秒間をカウントダウンする。ゴールキーパーが8秒を超えてボールを保持した場合、主審は相手チームにコーナーキックを与えることになる。

この競技規則変更の詳細と、それがどのように適用されるかは以下のQ&Aに記載されている。

Q+A

1. なぜ競技規則を変更する必要があったのか？

審判員がこの競技規則を施行せず、ゴールキーパーが、特に自分のチームが勝っているときに、時間を浪費し、試合のテンポを変えるために6秒よりはるかに長い時間ボールを保持していた。これにより、競技者、指導者、そしてファンが不満を抱くことになった。

2. なぜ審判員はこの競技規則を施行しなかったのか？

審判員は、ゴールキーパーが6秒より長い時間ボールを保持することを罰することはめったになかった。その理由は、ペナルティーエリア内で間接フリーキックを管理することは大変困難で、ゴールキーパーが長い時間ボールを保持すること以上に試合のリズムを乱したからである。

さらに、ペナルティーエリア内での間接フリーキックを与えることは、相手チームにとってもよい得点の機会を与えるという点で、厳しい罰則となるからである。これまでの競技規則は、反則(ゴールキーパーが6秒を超えてボールを保持すること)と罰則(間接フリーキック)が釣り合っておらず、不公平と見なされていた。その理由は、攻撃側のチームはボールを保持しておらず、またボールがゴールキーパーによって保持されているときはボールを奪える機会もないからである。

3. なぜ罰則が間接フリーキックからコーナーキックに変わったのか？

IFABは効果的に抑止できる方法、そして審判員が容易に管理できる再開方法を模索した。そしてコーナーキックが選ばれた。それは、ゴールキーパーはコーナーキックを与えたくないと考えていることと、コーナーキックは管理が容易であり、ペナルティーエリア内での間接フリーキックと比べてより素早く再開できるからである。

4. なぜゴールキーパーがボールを保持できる時間は6秒から8秒に伸ばされたのか？

分析の結果、ゴールキーパーが時間を浪費し、試合のテンポを遅らせようとしている場合を除き、ゴールキーパーは明らかにボールをコントロールしてからたいてい8秒以内に放していることが示された。

分析の初期段階、そして試行の結果からゴールキーパーがボールを放す時間には主に以下の3つのパターンがあることが分かった:

- 1-4秒: ゴールキーパーが素早いカウンターアタック*を始めたいとき
 - 5-8秒: ゴールキーパーは、素早くボールを放したいが、パスを出せる味方競技者が見つからない、または別の競技者が進路上にいるとき(たいていは偶発的に)。例えば、攻撃側のフリーキック、またはコーナーキックの後でペナルティーエリア内が競技者で込み合っているとき
 - 8秒以上**: ゴールキーパーが意図的に時間を浪費し、試合のテンポを遅らせようとしているとき
- *イタリアでの試行期間中、全体の61%の場面でゴールキーパーは4秒以内にボールを放していた
- **いくつかのケースでは、ゴールキーパーが20秒以上ボールを保持していることもある

5. ある試行ではスローイン、別の試行ではコーナーキックが用いられていた。なぜIFABは長い時間ボールを保持するゴールキーパーへの罰則としてコーナーキックを選んだのか?

試行に携わった関係者によって、スローインよりもさらに強い抑止力があると評価されたため、IFABはコーナーキックがより適切な罰則だと判断した。

6. いつゴールキーパーが手や腕でボールをコントロールしたとみなされるのか?

競技規則第12条によると、ゴールキーパーが手や腕でボールをコントロールしたとみなされるのは次のような場合である:

- ボールがゴールキーパーの両手、または両腕で持たれているとき
- ボールがゴールキーパーの手、または腕と他のもの(例えば、グラウンド、自分の体)との間にあるとき
- ゴールキーパーが広げた手のひらでボールを持っているとき
- ボールをグラウンドにバウンドさせる、または空中に投げ上げたとき

7. いつ8秒のカウントを始めるのか?

8秒のカウントは、ゴールキーパーが手または腕で明らかにボールをコントロールしていると主審が判断した時点で開始される。カウントダウンを開始するのに、ゴールキーパーが立っている必要はない。それは、特に時間が浪費される多くの場合、ゴールキーパーはボールをキャッチした後、不必要にグラウンドに倒れ込み、誰も立ち上がるのを妨げていないにも関わらずそのままの状態にいるからである。

もし、相手競技者が、ゴールキーパーが8秒以内にボールを放すのを妨げた場合、アドバンテージが適用される場合を除き、フリーキックがゴールキーパーのチームに与えられる。

8. 8秒の残り5秒をカウントダウンするために、なぜ主審は手を上げるのか?

主審が手を上げて5秒から0秒まで指を使ってカウントダウンするのは、ゴールキーパーが罰せられるのを防ぐためである。また、そのカウントダウンは、ゴールキーパーの味方競技者がカウントダウンを終える前にボールを受けられるようにするのに役立つ。

9. どちらのサイドからコーナーキックは行われるのか?

ゴールキーパーが罰せられた時に立っていた地点に近いサイドからコーナーキックは行われる。

10. どこで試行が実施されたのか?

イングランド、イタリア、そしてマルタで行われた400試合以上の公式戦で試行は実施された。第三者の(審判)オブザーバーがどれくらいの時間ゴールキーパーがボールを保持したかを計測した。

11. 試行期間中、ゴールキーパーが罰せられたケースは何回あったのか？

- ・ マルタでの179試合で、ゴールキーパーが8秒を超えてボールを保持し罰せられることはなかった。
- ・ イギリスでの160試合、そしてイタリアでの80試合で、ゴールキーパーが8秒を超えてボールを保持し罰せられたケースは(4試合で)5回だけである。それらはいずれも試合終盤のことであった。

12. 試行に参加した関係者からはどのようなフィードバックがあったのか？

監督、ゴールキーパーそして審判員にアンケートが実施された。ゴールキーパーの一部は他の関係者と比較してやや慎重な反応であったものの、その結果は非常に前向きなものであった。

- ・ 63.7%は、この変更は試合に良い影響を与えたと回答した。
- ・ 72.5%は、この変更の結果、試合のテンポがより速くなったと回答した。
- ・ 87.6%は、主審による5秒のカウントダウンは役立ったと回答した。

13. IFABの試行はたいてい2年続くはずだが、なぜこの試行は1年という短い期間だったのか？

400試合以上で反則がわずか5件しか起きず、試行への参加者から前向きなフィードバックが寄せられたこと、そして特にすべてのレベルの試合にとって有益であることを踏まえ、IFABはこの変更を競技規則に導入することを遅らせる理由はないと判断した。

新たな競技規則の文章

第12条 – 反則と不正行為

3. コーナーキック

ゴールキーパーが自分のペナルティーエリア内で、ボールを放すまでに手や腕で8秒を超えてコントロールした場合、コーナーキックが与えられる。ゴールキーパーが手や腕でボールをコントロールしていると判断されるのは、次のときである。

- ・ ボールが両手や両腕で持たれているとき、または手や腕と他のもの(例えば、グラウンド、自分の体)との間にあるとき
- ・ ゴールキーパーが広げた手のひらでボールを持っているとき
- ・ ボールをグラウンドにバウンドさせる、または空中に投げ上げたとき

主審は、いつゴールキーパーがボールをコントロールして8秒が始まるかを判断し、そして手を上げて目で見て分かるように最後の5秒のカウントダウンする。

ゴールキーパーが手や腕でボールをコントロールしているとき、相手競技者は、ゴールキーパーにチャレンジすることはできない。